

東北ヘルプ・ニュースレター 2025年夏号



本当の「復興」を望見する

ムスリム（イスラム教徒）と共に生きる、新しい東北へ 1~16頁

今、私たちにできる事を

実践宣証会議の報告 17~18頁

宗川さんの意見

「小児甲状腺がん」と「科学の解釈学」を巡って 19~35 頁

会計報告

36頁

巻末言

37~38 頁



本当の「復興」を望見する

——ムスリム（イスラム教徒）と共に生きる、新しい東北へ——

「3.11」は、新しい出会いを、たくさんもたらしました。そもそもずっと、「少子高齢過疎」の行き詰まりに立っていた東北です。そこに、震災を契機として、新しい出会いが生まれた。そこには「復興」の可能性があると思います。

ただし、「新しい出会い」によって、軋轢や緊張、あるいは憎悪や差別も、生み出すことがあります。その緊張を乗り越えなければ本当の「復興」もない、と思います。

2011年に津波で被災地となった石巻市に、2022年、まったく新しい「モスク」ができました。「石巻モスク」です。モスクは石巻市渡波という町に建設されました。渡波の町内会すべてが、モスクの完成を歓迎してくださいました。「3.11」を経て、石巻は少し、新しい豊かさを実感しています。

Google 検索結果
石巻モスク

すべて ニュース 地図 写真 ショッピング 動画 ショート動画 もっと見る ツール

khb東日本放送
https://www.khb-tv.co.jp/ 震災のニュース
イスラム教徒の心の拠り所に宮城・石巻市にモスクが完成
2022/07/06 — 宮城県石巻市にイスラム教の礼拝堂、モスクが完成しました。県内で暮らすイスラム教徒の心の拠り所になることが期待されています。

公益財団法人 宮城県国際化協会
https://imia-miyagi.jp/clubnia121 PDF
石巻市にモスクができる
2022/05/23 — ソヨド 現在のモスクは仮の建物です。いずれ、モスクだけでなくハラ、ルーフードの食材店やレストランも併設した4階建ての石巻イスラム文化センター ...
4 ページ

河北新報オンライン
https://ikahoku.news/ 石巻かほくメディア総合
イスラム文化の交流拠点に 礼拝所「モスク」が完成、石巻地方初
2022/07/21 — 石巻地方で初となるイスラム教徒（ムスリム）の礼拝所「モスク」が、石巻市松原町に完成した。市内のムスリムらでつくる一般社団法人「石巻イスラム文化 ...

インターネットで「石巻モスク」と検索してみると、たとえば Google では、上記のように、写真や記事が出てきます。

宮城県検討「土葬墓地」SNS検証

批判続出もデモ数名

宗教上の理由で土葬を必要とする人向けに宮城県が検討する葬式可能な墓地整備を巡り、交流サイトの井手への不安感は強く、4月29日には宮城県庁前で抗議デモもあった。どのように情報が拡散し、主張が展開されたのか。デモ前後のX（旧ツイッタ）の関連投稿を抽出し、検証を試みた。

（編集部・横山勲）



宮城県庁前であった土葬可能な墓地整備に反対の声を上げるデモの参加者

主張内容は一致
土葬墓地に反対するデモは4月9日に行われた。X社が提供するAPI（アプリケーション・プログラミング・インターフェース）というプログラムを使い、同7日午後14時頃のX上の投稿を「宮城」「土葬」のキーワードで抽出すると、計710件がピックした。金投稿のうち、自ら主張や意見を書き込んだ投稿は227件（26%）に限られた。他ユーザーの投稿をリポスト（再投稿）したケースが大半で特定のユーザーによる大量投稿はなかった。文面に「土葬」と記載のある投稿に絞って調べると、リストを含めて5件（0.7%）にとどまり、広がりを欠いていた。実際、デモに集まつたのは10人に満たなかつた。

参加者たちは「土葬墓地で風評被害が起きれば、品が売れなくなる」（移民政策ではなく）日本人が子どもを安

リポスト最多の仙台市議 「情報不足」県の姿勢問題視

心して差別的環境をつくるべきだなどと訴えた。主張内容は抽出した文上の投稿とほとんど一致していた。

差別的投稿散見

最もリポストが多かつたのは、伊藤優太仙台市議の4月10日の投稿。土葬墓地に関する行政文書を開示請求した結果、ほぼ黒塗りだった経緯を紹介。リポスト数は14時時点5010件になり、その後方件近くにまで達した。続いてリポスト数が多かつたのは、保守系まとめサイトの2067件。宮城県外の政治団体代表の51件。いずれも土葬墓地を取り上げたテレビニュースの一部を引用して投稿を作成していた。反響を受け、土葬に関する情報公開を求める団体を24日に設立した伊藤市議は「情報が足りないと不安が広がり、SNS上で個々の想像がたましくなってしまう」と述べ、県の説明不足を問題視した。

土葬墓地整備の是非は「現時

点で積極的に反対しているわけでも、賛成しているわけでもない」と強調。X上には土葬問題に絡めた外国人差別をあおる投稿が散見される現状から「冷静な議論を促す意味でも、県はもつと判断材料を示すべきだと注文を付けた。

2025年5月7日『河北新報』

ただ、2024年に、心痛む出来事が起こりました。「郷に入っては郷に従え」とムスリム（イスラム教徒）に厳しく迫る声が、インターネット上に溢れました。

「イスラム教徒が土葬墓地を必要としている」と、宮城県知事が県議会で語ったことが、そのきっかけでした。人のいのちを巡る繊細な議論が宮城県内の政治の俎上に乗せられ、

「外国人に気を遣つて、私たち日本人を無視するのか」という怒声が上がる。

多くのムスリム（イスラム教徒）の方々を切り捨てるような心無い言葉が、しばらく、跋扈したのです。

今は、そうした政治状況なのでしょう。そして政治の事柄は、時間と共に風景が変わる。でも、私たちは、日常を生き続けなければならない。今、私たちは、ムスリム（イスラム教徒）と、共に生きている。私たちは今、その隣人と、出会っているだろうか。出会いを大切にしなければ、「本当の復興」を取り逃すのではないか——そんなことを思って、バングラディッシュ人と日本人のムスリム（イスラム教徒）の方に、お話を伺いました。お二人とも、震災後に石巻にお住まいになってくださった方です。

以下、その対話をご紹介します。「本当の復興」へと向かう出会いの対話を、どうぞ、ご一緒にいただければ幸いです。

（2025年6月17日 川上直哉 記）

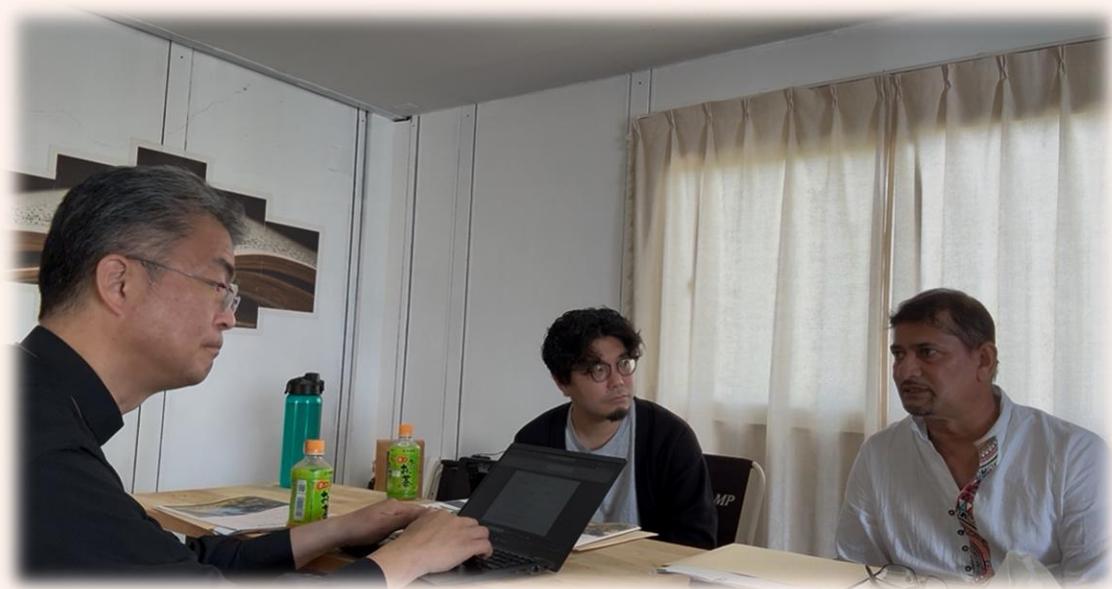
——ソヨドさん、西川先生、今日はどうぞよろしくお願ひします。

ソヨドさん：

よろしくお願ひします。

西川先生：

こちらこそ、どうぞ、よろしくお願ひします。



——それでは、まずソヨドさんから、自己紹介をお願いします

ソヨドさん：

ソヨド・アブドゥル・ファッタ、と言います。1970年にバングラディシュで生まれました。日本では「ソヨドさん」と呼ばれています。

——「ソヨド」という言葉の意味は、何でしょうか？

ソヨドさん：

私たちのファミリーネームです。昔からのものですから、はっきりわかりませんが、アラビヤ語の「サイード」と関係があるかもしれません。もしそうであれば、「アッラーの子」という意味になります。実際、私のひいおじいさんは、アラブ人でした。

——いつ頃、日本にお越しになりましたか？

ソヨドさん：

私が日本に来たのは、1995年です。

——故郷のお話を聞かせていただけますか？

ソヨドさん：

はい。私が生まれた町・バングラディッシュのラムブル市は、人口100万人くらいの、人数の多い町でした。私の生まれた頃、バングラディッシュ人の平均寿命は60才くらいだったと思います。

私は7人きょうだいの末っ子として生まれました。きょうだいは、上から、お姉さん、お兄さん二人、お姉さん3人、私、という構成です。私の家は代々、地域の大地主でした。イギリスの植民地時代、私たちたちの家族は、大きな庭があるイギリス風のビルディングに住んでいました。今でも、そのビルと井戸は残っています。

親戚は、バングラディッシュ国内だけでなく、世界中にいます。親戚の中にはバングラディッシュの最高裁判所の判事や大統領を務めた人たちもいました。

私の父は、国家公務員の管理職をしていました。お父さんの時代、バングラディッシュはまだインドと一つでした。それで、父はカルカッタの大学を卒業しました。

——日本について、どのようにして知ったのですか？

ソヨドさん：

小学校にあった本で、日本を知りました。そこには写真付きで、日本人の性格、ライフスタイル、広島・長崎・・・そうしたことが書いてありました。真面目で、「おもてなし」という文化があることも、印象に残ったのでした。

——小学生の頃、ということは、第二次世界大戦が終わり、インドから分かれてパキスタンが独立し、そしてそこからバングラディッシュが成立する、という激動の頃ですね。

ソヨドさん：

はい。第二次世界大戦が終わった後の混乱と、その中の生活の苦労については、よく聞かされました。私が生まれた時は、私の国はまだ「インドから独立したパキスタン」の一部、だったのです。そして、インドとパキスタンとの間の微妙で厳しい駆け引きの中で、

内戦（バングラデシュ独立戦争）やインドの介入（第三次インド・パキスタン戦争）を経て、1971年に、私たちの国・バングラディッシュは、パキスタンから独立したのです。その激動の歴史の中で、私たちは生まれ育ったのです。

——そして、日本に来てくださいました。

ソヨドさん：

はい。10才くらいの頃、日本に行こうと考えました。バングラディッシュで専門学校を卒業し、そして日本に來たのです。

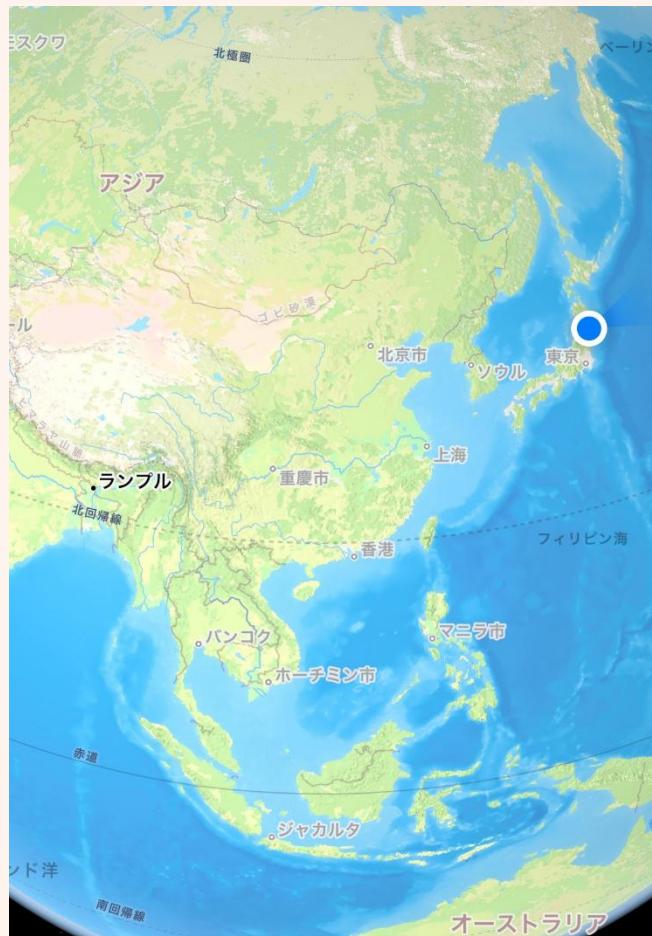
私は昔から「時間を無駄にしない」という性格でした。子どもの頃からバングラディッシュの工場や建設現場で働き、そして勉強を続けました。建設業をするつもりで日本に來てからも、同じでした。親戚にも力を借りて、仕事をしながら、仲間に日本語学校の教材を借りて、勉強したのです。その時、姉が名古屋大学大学院にいました。地質学を研究していました。兄弟で助け合い、日本での生活がスタートしたのです。

そして東京で日本人と結婚し、お金を貯めて、神奈川県で起業しました。2000年スタートの「ソヨド建設有限会社」です。基礎工事を請け負うことから始めました。景気の変動に揉まれながら、とにかく、会社を守ってきました。おかげさまで、今も続いています。会社としては「23期」が終わったところです。

——日本人と結婚されたのですね。でも、袁しいことに、2007年に、お連れ合い様が亡くなつた、と伺っています。

ソヨドさん：

それは、本当につらいことでした。妻は日本人でしたのに、ムスリム（イスラム教徒）になってくれました。その上で、実家の家族とも良い関係を築くことが出来ました。本当に、幸せなことでした。



——ムスリム（イスラム教徒）は「火葬」をしませんね。お連れ合い様のご実家の方々は、「土葬」に、どんな思いをもたれたでしょうか？

ソヨドさん：

妻は「ひとりっ子」でした。ですから、家族とお墓の問題は、重大なことだったと思います。私たちは結婚するときに、そのことを、家族みんなで、話し合いました。そして、夫婦になった時にはもう、火葬しないことも、みなさんにお理解してもらうことができました。

妻は29才で亡くなりました。その時、私たちは神奈川県相模原市に住んでいました。市役所から土葬のための書類をもらって、山梨の土葬墓地に埋葬しました。

——お墓は、どのようなものですか？

ソヨドさん：

ムスリム（イスラム教徒）の間では「共同墓地」が基本になります。みんな一緒にいた方がいい。そんなふうに、考えます。

——そしてその後、「男手ひとつ」での生活が始まりましたね。

ソヨドさん：

保育園と小学校の子どもがいました。みんなと一緒に、たいへんな生活が始まりました。それで、姉の力を借りて、バングラディッシュで子どもを育ててもらい、私がひとりで日本での生活を整えることにしました。そうした生活が、4年も続きました。その間に、2011年の震災が起こりました。そして、私は被災地の仕事に呼ばれたのです。

——そうですか。そこから、被災地での生活が始まったのですね。

ソヨドさん：

私は昔から「赤十字ボランティア」を長くバングラディッシュでやっていました。ですから「被災地の支援活動」ということについては、よくわかっていました。ただ、2011年の場合は、福島原発事故が、とても、心配でした。

——原発事故については、日本国内と違い、海外の情報は、正確で迅速でした。

その「海外の情報」を直接に受け取った・・・とても、怖かったと思います。

ソヨドさん：

はい。それでも私は、「これもきっと、他人のために、自分に何かできるチャンスかもしれない」と思ったのです。ずっと私は、「500円あれば、100円を誰かにあげる」という思いで、生きてきました。「お金持ちになってからではなく、手伝える時に、何かやりたい」と思っていました。それで、自分なりに情報を集めて、大丈夫だと思って、名古屋から宮城県へ移住したのです。

最初は「自動車一台」で来ました。悪路をずっと運転して、朝になってようやく、東松島市に到着した、その時のこと、よく覚えています。そして、津波被災地での仕事をスタートしました。やはりその時も、家の基礎工事に従事しました。2011年8月のことです。まだ、瓦礫がたくさんあって・・・いつも「泥かき」をしていました。



見回すと、船が家の上に乗っかっている。そんな現場でした。最初は短期間で終わると思ったのですが、いつの間にか冬になりました。石巻に仕事で呼ばれたとき、瓦礫がまだまだ残っている中に、「リフォームしたての家」が一軒ありました。「これは！」と思い、すぐ、購入を決めたのです。そして今でも、その家に住んでいます。

——そして、ご家族みんなで、石巻にお住まいになりましたね。

ソヨドさん：

2010年に、姉の紹介で、バングラディッシュ人の女性と再婚しました。今の妻です。私が日本で生活を整えている間、子どもたちをバングラディッシュで育ててもらいました。そして、2013年に、子どもたちと一緒に石巻に来てくれたのです。

——2013年と言えば、まだ、震災の爪痕が色濃い石巻でした。

ソヨドさん：

そうなのです。特に、夜は真っ暗な石巻でした。「怖い。バングラディッシュよりも暗い。」と、妻は驚いていました。「いや、まさにこれから、なんだよ」と、私はいつも、言っていました。

下の子どもたちは、日本語が分からぬながらに、石巻市立湊小学校に入学しました。本当に、学校には、良くしてもらいました。校長先生をはじめ、先生方に、感謝しています。上の子どもは、義務教育レベルを終えてから日本にきました。それで、仙台の東北高校の中のインターナショナルスクールに入学しました。バスで仙台に行き、スクールバスに乗っての登校になりました。

——そして、ソヨドさんご自身は、被災地の仕事を続けてこられました。

ソヨドさん：

仕事は、古川・気仙沼・大船渡・釜石まで、広い範囲で請け負ってきました。特に、石巻市の湊小学校の周辺では、何十件も、家を建てる仕事に携わりました。そうして、津波で壊滅した地域が、徐々に回復する様子を見てきました。

——町は、復旧して行ったのですね。

ソヨドさん：

でも、小中学校の生徒数は、とても少なくなりました。みんなの中に、「怖さ」がある限り、なかなか、昔の賑わいは戻らないだろうと、実感します。



——続いて、西川先生にも、自己紹介をお願いしたいと思います。

西川先生は「日本人ムスリム（イスラム教徒）」でいらっしゃいますね。



西川先生：

仙台で生まれ、大学まで、仙台で過ごしました。研究のためにインドネシアに留学したことが、ムスリム（イスラム教徒）になることと、深くつながっているように思います。

インドネシアにいる時に、2011年の震災になりました。その年の3月20日まで、インドネシアに滞在するつもりだったのです。3月11日の津波とそれに続く原発事故を受けて「日本に帰ることができるのだろうか」と思いました。つまり、海外から見ると「日本にはもう戻れない」と思わされたのです。特に、福島原発の事故は、そのように伝えられていました。周囲からも「このままインドネシアに暮らせ」と、そう助言されものでした。仙台市若林区の沿岸地域「荒浜」あるいは仙台を代表する海水浴場の「深沼」という地名を、インドネシアで聞いたことは、何とも言えない思い出です。

それでも、とにかく、やはり、日本に帰りました。帰って来て、まずは千葉県の親戚の所へ身を寄せました。実家のライフラインの復旧を待ったのです。その時は、まだ、私はムスリムではありませんでした。

その後、仙台に戻ってから「仙台モスク」に行くようになりました。そのことに、震災の影響は、きっと、あったと思います。モスクで、インドネシアの人々の話を聞いたりしていました。仙台モスクには、世界中の国々から、たくさん支援物資が届いていました。それを用い

て、モスクに集まる人々が、物資の配布をし、また、炊き出しをしていました。夏まで、続いていたと思います。私も参加しました。石巻の鮎川、また、仙台近郊の七ヶ浜などでの活動は、思い出深いことです。ナシゴレンを作って、「チャーハンだ」と言われたり、インドネシアの踊りをご披露したり・・・

——そして今は、石巻で生活されていますね。

西川先生：

2023年に、石巻専修大学に就職しました。もともと、文化人類学を専門にしていたのですが、今は「復興の社会学」を担当しています。

——そして、今は日本人ムスリム（イスラム教徒）として、
石巻モスクでソヨドさんと一緒に活動しておられますね。

西川先生：

私はずっと、イスラームに関心を持ってきました。インドネシアに留学して「テレビで見て
いるだけでは、何も分からぬ」と実感しました。でも、ムスリム（イスラム教徒）に改宗した
のは、つい最近のことです。

——イスラム教への最初の印象は、やはり、テレビから得たのですね。

西川先生：

「9.11」のテロが起った時、私は中学生でした。その印象が強く残っていたのです。私は、
ずっと「テロとの戦争」という言葉に、強い違和感を覚えていました。インドネシアに行って、
「イスラームのある生活」に触れて、実際にナチュラルに感じたことが、私にとっては大きかつ
たと思います。そして「ムスリム」と言っても、実際に「色々な人」がいることに気づいて、い
よいよ、面白くなつたのです。

——なにか、印象深いエピソードなどを、お分かちくださいますか？

西川先生：

留学先の大学で、文化人類学を学んだ時のことです。そこに、詩人の学生がいました。イス
ラームの指導者の息子でした。芸術家として活躍しつつ、親御さんが主宰しているイスラーム
の塾で、貧しい人を助けていました。2009年頃、30歳前後だった彼に、私は出会い、とても
強い印象を覚えました。「イスラームの人々の多様性」を学び始めたのは、そこからだったと思
います。そして、様々な人々が平和に暮らす経済のつくり方にも惹かれました。「リスクのシェ

ア」という考え方方が徹底しているのがイスラームの社会だと思います。

ソヨドさん：

「利益を受けるなら、マイナスも受けなければならない」という考え方方が、イスラム教にはあります。それは、とても大切な考え方だと思います。

西川先生：

そして、ひとりのインドネシア人女性に出会い、交際を始めました。そして真剣に、ムスリムへの入信を考えました。でも、すぐには改宗しませんでした。その間、調査でインドネシアに2年半住み、たくさんのこと学びました。学ぶほど、疑念が生まれたのです。でも、相手の方の思いの中で、アッラーの導きを感じました。そして震災を経て、2017年に改宗したのでした。



——それでは、お二人にお伺いします。

まず、「イスラム教」とは、大づかみに言えば、どういうことなのでしょうか。

ソヨドさん：

「ヒダヤ」という言葉があります。それは日本語では「導き」と訳されていますが、「アッラーから降りてくる」というイメージで、私たちはその言葉を使っています。この「ヒダヤ」が、とても重要だと思っています。

ムスリム（イスラム教徒）の生活は、実にすっきりしています。

毎週、金曜日のお祈り「ジュンマ」を軸に据えて、生活を整えています。「ジュンマ」では、礼拝の中で、説教が行われます。それを聞いていれば、自然と、イスラム教が身体化されて行くようになります。もちろん、行きつ戻りつしながら、でも、無理なく自然に、人はそれぞれ変わって行くのです。

そして毎年「ラマダン」があります。「日中に断食をする」という特別な日々を、毎年迎えるのです。毎年のことですから、昨年の自分と引き比べて自分自身が変わって行く実感を、はっきりと感じることができます。

もう一つ、大切なことがあります。金曜日の「ジュンマ」がその積み重ねの日々の軸になる、と言いましたが、更に細かく言えば、毎日決まった時間にお祈りをしています。それはどういうことかというと、つまり、その様にして、毎週・毎日・毎回、私たちはリセットし続けている、ということなのです。

インタビューの日は、
金曜日でした。
インタビュー終了後、
若い方々が
モスクにたくさん
集まって、
ソヨドさんと一緒に
礼拝をして
おられました。



その様にして、少しづつ自分自身が整えられ、さらに、折々にリセットして日々を歩いて行く。それがイスラム教です。

——ソヨドさんは、ムスリム（イスラム教徒）の社会で生まれ育ち、イスラム教の影響が少ない日本に来て、日本人のクリスチヤンである私にも分かるように、今、お話しくださいました。西川先生は「普通の日本人」として日本に生まれ育ち、そしてイスラム教に出会い、改宗されました。今のソヨドさんのお話を聞いて、どのように感じられましたか？

西川先生：

今、改宗前までに見てきたものと、逆の景色が見えているように思います。たとえば、宮城県では一部、「土葬」について、大きな話題になっています。私たちムスリム（イスラム教徒）は、「火葬」されることに、つよい抵抗感をいだきます。何とかして「土葬」で葬ってほしい——私も、少し前まで、そうした感覚は異世界のもの・異文化なのだと思っていました。でも、今は、はっきり、その「反対側」の世界に来たように思っています。つまり「火葬をする人たちもいるのか。不思議だな」という感じです。そうすると、興味深いことに「火葬の不自然さ」が気になってくるのです。

そういう私は、つまり、「火葬が当然」という考え方も、もちろん、理解しています。でもそれは「自分の事柄」ではないように感じる。ムスリムとして「自分が変わる」ということは、そういう事なのだと思うのです。

——石巻のような東北の被災地は、もともと、どこでも、凄まじい「少子高齢過疎」の中にありました。そこに津波が来て、あるいは放射性物質が降り注ぎ、全てが「更地（さらち）」になって、そこから復旧し、今「復興」しようと、私たちはもがいています。でも、現実として、石巻圏は今、「毎年3,000人」の人口減という事態に直面しています。

「復旧＝旧態に復帰する」ということは、「少子高齢過疎の現場に戻る」ということもあるのです。圧倒的な人手不足の中で「復興」が目指されます。でも、ソヨドさんや西川先生のような方々が、一緒に生きて・働いて下さる。そうしますと、きっと、私たちは「新しい何か」の可能性を見出せるかもしれない。そして初めて、私たちは「復興」ができるのではないか。そんなことを、思いました。



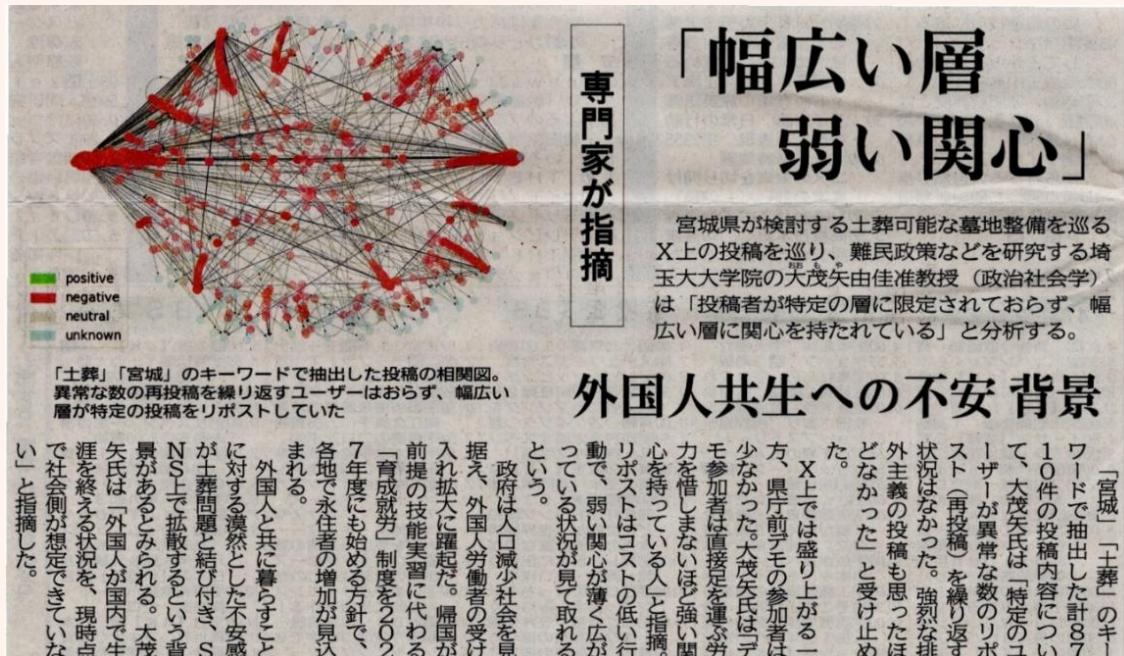
2025年1月24日『石巻日日新聞』

西川先生：

ただ、「排外主義」が強まっていることは、確かに思います。埼玉県に住む「クルド人」を問題視する激しい声が、インターネットに溢れています。そして宮城県では「イスラム教徒の土葬墓地」を問題視する声が、ネットの中で増幅したことを、心配しながら、注視しています。

——「スケープゴート」は、いつも、弱い者いじめとして起こりますね。古くは「非国民」、つい10年前くらいには「ワカモノ」「ゲーム脳」「ゆとり世代」と来て、最近は「老害」という言葉が語られるようになりました。そして、その最新版が「外国人」です。どんな人々の中にも、事故を起こす人もおり、事件の加害者になる人もある。それが私たち人間の現実です。だから、それを不自然にフレームアップすれば、いじめの標的になる。そして、正義の名のもとに、人々を「いじめ」の方向へと扇動する。その時にやり玉にあげられるのが「スケープゴート」です。

少子高齢過疎をはじめ、様々に、今の社会は行き詰まりを感じさせるものになっています。それで、今、多くの人が、ムスリム（イスラム教徒）をスケープゴートにする、つまり「あいつらが問題なのだ、あいつらを消してしまえば、この行き詰った現状も、何とかなる」と思い込んで、現実を見ないで済ませる、そんな誘惑に駆られているように感じられます。



2025年5月7日『河北新報』

そして最近は、インターネットがあるのです。簡単に噂を立て、針小棒大に騒いで、その思い込みの噂話を増幅する。そういう形で、外国人への恐怖感が吹聴されています。日本人として、この社会と一緒に生きる「ひとりの人」として、私は申し訳なく、恥ずかしく思っています。

ソヨドさん：

人間は、間違える。それが「人間は自由だ」という事の、本当の意味です。でも、神は間違えない。だから、人間の自由を整えるために、コーランとハディース（ムハンマドの言行録）が重要だと考えるのが、私たちムスリム（イスラム教徒）です。私たちムスリムの多くは、それを親に教わります。でも「誰かに教わったから、それを守る」のではなく、「自分で生きて行きたい」と、私は思います。そうして、私はイスラム教を学んでいるつもりです。

——少子高齢過疎の現実は、震災前から変わらず、震災を経て、いよいよ厳しくなっています。でも、津波の圧倒的な被害の中から、ソヨドさんや西川さんのような「新しい方々」と一緒に生きる新しい世間が、今、立ち上がりつつあります。

ソヨドさん：

私は「世界中を手に入れても、死ぬのが人間だ」と、真剣に考えて生きています。そういう私の生き方は、多くの方にとって、新鮮なものであるようですね。私は親しい人に、「あなたの“本当に”欲しいものを言ってください」と質問します。「世界中を手に入れても、死ぬのが人間」と腹を括（くく）った上で、「本当に」欲しいものを、考えてほしいのです。実際、それを考えながら、私は一日5回のお祈りを続けます。そして、はっきりと「本当に」欲しいものが分かったら、夜の2時半と朝4時に、特別のお祈りをするようにするのです。そうすれば、必ず、アッラーに願いは届く。そう、イスラム教は私たちに教えています。

——ムスリム（イスラム教）の皆さんには、生活の「理想の姿」をはっきりと持っているように思います。そこが、とても特徴的だと感じています。

ソヨドさん：

「ハディース」という聖典があるのです。そこには、ムハンマド（マホメット）の生活の全てが記されているのです。それで、「ハディース」に書いてあることをなぞって、人はアッラーに近づくことが出来ると、私たちは考え、自分の生活を整えているのです。

西川先生：

「ムハンマド（マホメット）の真似をする」ということが、ムスリム（イスラム教徒）の生活の枠組み・基準になっています。たとえば、私たちが「ひげを伸ばす」ことを好むのは、そのせいです。あるいは「トイレは座ってするもの」と考えたりします。「ムハンマドがそうしていた」と書いてあるからです。あるいは「火葬」は、「ハディース」の示す生き方とは異なりますから、私たちにとっては「とても嫌なもの」となります。

ソヨドさん：

それで、私たちは日本で生きていくために、「土葬」ができる墓地があればと、強く願っています。そして、私はその願いをアッラーに届けるように、丁寧にお祈りしているのです。

——皆さんと一緒に生きる。そこには新しい東北が立ち上がります。そこにはきっと、課題も苦労も立ち上がる。だから、いよいよ、皆さんと一緒に、課題と向き合い、苦労を共にする。そして、「これまでとは違う東北の豊かさ」をご一緒に喜ぶことが出来る、そうしたことが「復興」という事の本当の意味だと、また新しく考えさせられました。

今日は、本当にありがとうございました。

インタビューの後、礼拝が行われ、
その後は、みんなで昼食の時間となりました。
フィリピン、シンガポール、
アラブ、マレーシア、
そしてバングラディシュの若い人々が
本当に和気あいあいと過ごしておられました。



今、私たちにできる事を

実践宣証会議の報告

東北ヘルプニュースレター「2025 年クリスマス号」に引き続い、「実践宣証会議」の報告をいたします。

「3.11」の後、様々な教団教派のクリスチャンが、東北の支援に駆け付けて下さいました。東北は、それ以前から「少子高齢過疎」の激しい現場でした。東北の多くの地域には教会もなく、あるいは、存在している教会は往時の勢いを失っている。津波の惨状から復旧した後、その「元の現場」が、より厳しい形で、戻って来た。それが「被災後の日常」でした。

しかし、そこに新しいことが起こりっています。「3.11」の現場に関わり続けるクリスチャンたちが、教団教派の「違い」を軽々と乗り越えて・広域に連携しつつ、交流を続け、祈りを共にしています。その一つの具体例が「実践宣証会議」です。こうしたことは「教会の元気がよかつた 1980 年代」には、なかなか、考えられないことでした。そして、こうした協働から、「少子高齢過疎」の現場にふさわしい力が湧き出ています。

「コヤシの思想」という言葉があります。「タネの思想」と対比される言葉です。「タネをまく」ように事柄を考える場面もある。でも、「コヤシを大地に入れる」ように事柄を考える場面も、ある。「少子高齢過疎」の現場は、まさに「コヤシの思想」の場面ではないか——そんなことを考えながら、ここに、「実践宣証会議」の報告をいたします。今回は、世話役を担ってくださるスミスドルフ宣教師に、報告をしていただきます。ぜひ、お読みください。

(2025 年 6 月 26 日 川上記)

2025.6.2(月) 実践宣証会議 報告

「実践宣証会議」世話人 スミスドルフ 契子(OM日本宣教師)

6 月最初の月曜日、前日までの雨とは打って変わって、気持ちよく若葉が輝く天気となりました。

昨年から計画していた、山形県西蔵王の森谷先生ご夫妻(保守バプテスト同盟)宅での実践宣証会議がようやく実現しました。

今回の集まりには、気仙沼市から嶺岸牧師ご夫妻(保守バプテスト同盟)、登米市と大崎市から、大原牧師(イエス福音教団)とスミスドルフ宣教師(OM日本)、リーシン宣教師

(インターチャーチ)、石巻市から東北ヘルプの川上代表(日本基督教団)、多賀城市から大友牧師(保守バプテスト同盟)、仙台市から東北ヘルプ理事の中澤宣教師ご夫妻(基督聖協団)、合計 11 名が参加しました。

震災後、さまざまなかたちで協力関係を築き、14 年という時を経ても同僚者として交わりの時を持てる幸いに、心から感謝しています。キリストの体における一致というものの素晴らしさを改めて覚えています。

東北ヘルプニュースレター「2025年夏号」



目の前に広がる森林の景色を眺めながら、それぞれの近況も分かち合い、今後の活動について情報共有しました。



2～3か月に一度行っているこの集まりにより、仙台、石巻、登米、南三陸、気仙沼方面の働きの様子を耳にして、視野と理解が広がります。



この宣証会議は、美味しい食事を一緒にいただくことも大きな魅力で、私たちの心も身体も和むのですが、今回は美味しい地元特産のお食事をいただきました。

少子高齢化が進む地方の教会に何ができるのでしょうか。

ある先生が、「教会には行ってはいないものの、聖書を読んでいる人、信仰を持っている人は案外多い」とおっしゃいました。

「収穫は多いが、働き人は少ない。」

人々がキリストの愛と救いに触れ、キリストの体に結ばれて共に歩み、福音を証していく為に、今の私達にできることは何かと考えさせられます。

そして、キリスト者が教派の垣根を越えて集まり、互いの違いを受け入れ、励まし合い、祈り合うという歩みこそ、今の時代における教会の変化への一歩なのだと思わされています。

(了)



宗川さんの意見

「小児甲状腺がん」と「科学の解釈学」を巡って

東北ヘルプは「ニュースレター」2024年クリスマス号において、「報告：『ソーカワ事件』を巡って」という記事を掲載しました。それは、

- 東北ヘルプの「ニュースレター」2023年クリスマス号において、宗川吉汪著『福島小児甲状腺がんの「通常発生」と「被ばく発症』』(2022年、文理閣)が紹介される。
- 加藤聰子さんから、この本の結論について、重大な問題があることが、お手紙で、東北ヘルプ宛に知らされる。
- 東北ヘルプはオンライン会議を開催し、この問題について、加藤さん・川上を含む複数名での話し合いを行う。
- そのオンライン会議の報告を、東北ヘルプは、ニュースレターに掲載した。

・・・というものでした。

この記事を読んだ宗川さんが、東北ヘルプ宛、
メールで以下のように、連絡をくださいました。

先日たまたま知人から、貴誌「東北ヘルプニュースレター」2024年クリスマス号に「ソーカワ事件」の記事が掲載されているとの知らせを受けました。加藤さんや林さんの宗川論文に対する批判記事がありました。

つい最近、この問題に関して一応の決着がつきましたので、お知らせした方が良いと思い、メールしました。

宗川論文発表、加藤さんらの批判、国際誌の判断など時系列で以下まとめました。ご参考までに資料を添付しました。

みなさまとお話しする機会があれば幸甚に存じます。

「ソーカワ事件」などと、人のお名前をもじった記事を掲載したご無礼を、私は深く恥じました。申し訳なく思いつつ、早速「オンライン会議をさせていただきたい」と、お返事を申し上げました。宗川さんは、すぐに、応じて下さいました。

東北ヘルプニュースレター「2025年夏号」

私たちは支援団体にすぎません。科学の厳しい論争に決着をつける役割を担うことは、まったく、無理なことです。ただ、様々な立場の科学者が、今も真剣に、福島原発事故の被災者を思ってくださっている。「論争」も辞さないほどに、真剣に関わってくださっています。そのことが伝われば、どんなに大きな励ましになるだろう。その様に考えました。

また、一方の批判を掲載した私たちには、当然、機会があれば、批判された側の反論を掲載する責任がある、と考えていました。

宗川先生の御高配を賜り、ここに、新しいオンラインの会議の様子を掲載いたします。なお、会議は3時間余におよび、とても、全てを掲載できませんでした。それで、川上の要約を参加者に改訂していただいて、ここに掲載します。

また、この会議のために、『日本の科学者』という雑誌に、たくさん学びました。特に、この雑誌の発行者である「日本科学者会議」のホームページ内「JJS OPINIONS WEB 版」(<https://jsa.gr.jp/04pub/jjs-opinions/index.html>) にある「「科学の価値中立説」をめぐって」の諸論文に、有益な学びを得ました。その学びがなければ、宗川さんの御議論のほとんどを、川上は理解できなかつたでしょう。蓄積された貴いお働きに、別して感謝を表します。(2025)

(2025年6月23日川上直哉記)

——今日、司会をさせて
頂きます、川上と申しま
す。宗川先生、今日はあ
りがとうございます。

今日は、東北ヘルプ理事の木田さんにも、参加していただきます。まず、木田さんから、自己紹介をしていただけますか？

木田 :



左上:木田恵嗣さん 下:宗川吉汪さん 右上:司会の川上

郡山市でキリスト教会の牧師をしています、木田惠嗣（きだ けいじ）といいます。原発事故の時には、福島市にいました。原発事故の時、まだ年齢は50代でした。2012年に福島市から郡山市へ転任して、郡山市の教会の牧師をしています。

震災後、「福島県では、子どもたちの被ばくの問題が一番大きい問題だ」と思いまして「保養プロジェクト」を提供する活動を7年くらいしました。キリスト教団体としての活動でした。参加者も減少し、資金の枯渇もあり、そのプロジェクトは終わりました。

2011年に「福島県キリスト教連絡会（FCC）」を立ち上げ、諸教会が協力して支援活動をする仕組みを作り、その最初の代表になりました。そして、その連絡会の中に「放射能問題対策室」が出来ました。その枠組みで、ずっと、勉強会を続けてきました。「素人である牧師が、自分たちの頭で考えて判断できるようになりたい」と思って、始まったプログラムです。今、10年以上継続し、数十冊の本を読み、あるいはみんなで見学等をして、勉強を続けてきました。このプログラムの中で、宗川先生の本は、加藤さんからのご批判があった本のほかに、さらにそれ以前に一冊、読んでいました。その時も、胸のつかえができる思いがしたのでした。



先日、宗川先生の本に厳しい批判がなされた、ということで、東北ヘルプのオンライン会議が開かれ、それがニュースレターの記事になりました。私は、教会の用事が重なって、その会議には出席できませんでした。そして、その様子の報告を受けて、私としては、どうも、納得がいかないと思っていたのです。

今回、先生のメールを頂き、とても良かった、有難いこと、と思い、感謝しています。

——宗川さんは、加藤さん・林さんへの反論となるご議論をまとめられ、論文として発表されました。そのことを、私宛にもお知らせくださいました。私はすぐ、是非お話を伺いたいと願いましたら、宗川さんは快諾くださいました。それで、今日のこのオンライン会議になったのでした。改めて、感謝申し上げます。

それでは、宗川さん、まず、自己紹介をお願いいたします。

宗川：

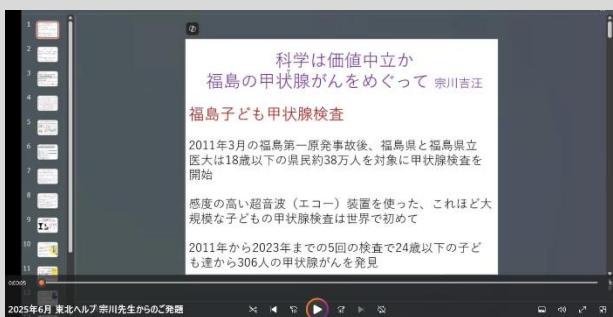
宗川吉汪（そうかわ よしひろ）と申します。私の科学者としての専門は、広い意味で「生物科学」となります。狭く言えば「生化学・分子生物学」です。それで、甲状腺がんに対しても、強い興味をもってきました。

私自身は、教会と、あまり関係がないのです。しかし、妻の実家は、キリスト教会と密接でした。妻の祖父は日本基督教団の牧師でした。東京四谷にある千代田教会の設立者の白井慶吉です。彼は長命で、1985年に103歳で亡くなりました。妻の両親も、教会に関係

していました。義父は戦中戦後 東大Y M C Aの主事で、戦後は国際キリスト教大学の設立に尽力しました。白井の祖父が、私たちが結婚する時、私がクリスチヤンでないのを、たといへん残念がったことを覚えています。そんなわけで、キリスト教については、親しみを持っている私です。

今日、私は、少しのスライドを用意して、お話を纏めてきました。それをもって、この話し合いを始めてよろしいでしょうか。

——ぜひ、お願ひします。



宗川さんからのご発題は、

<https://youtu.be/80kJ4XhnQZw> ⇌ こちらか、右上のQRコードから全編をご覧いただけます。

以下には、川上による議論の要点を記します。

宗川さんのご発題は、前半と後半に分かれます。
ここでは特に「前半」の議論を中心に要約します。
読者の皆様におかれましては、どうぞ、
ビデオで全体をご覧いただければ幸いです。

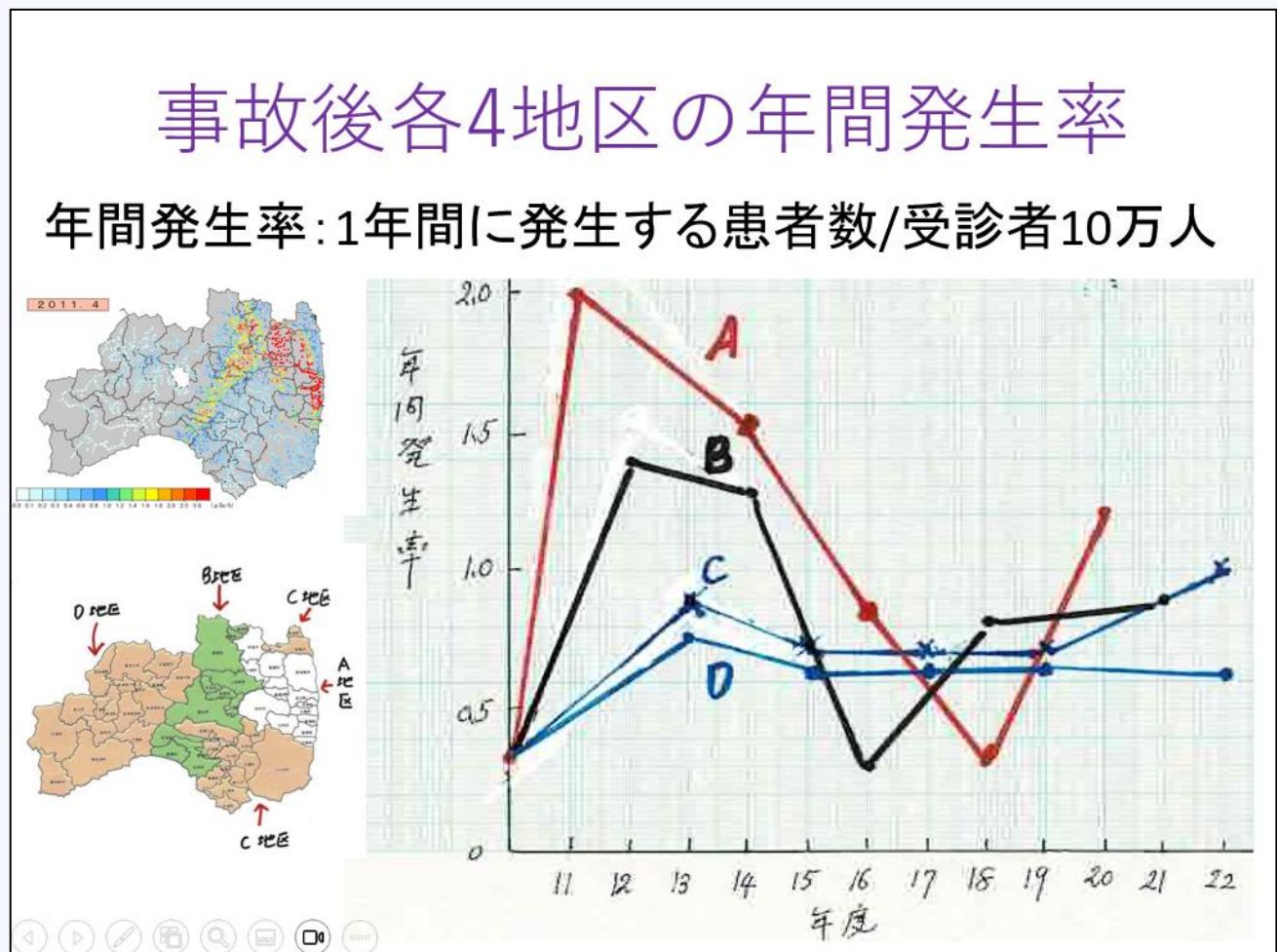
(1) 前半：宗川の主張とその意義

- a. 東京電力の原発事故を受けた「福島子ども甲状腺検査」の概要は、以下の通りである。
 - 2011年3月の福島第一原発事故後、福島県と福島県立医大は、事故当時の年齢で「18歳以下」の福島県民「約38万人」を対象に、甲状腺検査を開始する。
 - これほど大規模な子どもの甲状腺検査を、きわめて感度の高い超音波（エコー）装置を使って行なったのは、世界で初めての事である。
 - その結果、2011年から2023年までの5回の検査によって、24歳以下の子ども達から306人の甲状腺がんが発見された。これをどのように解釈すればよいか、が、問われている。
- b. 「福島子ども甲状腺検査」の結果に対して、相対立する二つの解釈が提示されている。
 - 第1の見方：今回の原発事故において、子どもたちの被ばく量は少ない。調査で確認された発症は、事故とは無関係である。多数の患者の発見は集団検診によるスクリーニングの結果である。
 - 第2の見方：国立がんセンターが発表しているがん統計では、18歳の甲状腺がんは「100万人に2人」だから、発見された患者のほとんどは被ばくで発症したものである。
- c. 「第三の立場」として、宗川は以下の論文を発表した。

“Radiation-Induced Childhood Thyroid Cancer after the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant Accident,” *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 2024, 21, 1162.

d. 宗川が主張した「第三の立場」は、以下の通りである。

- 甲状腺がん発症に明瞭な地域差が確認された。放射線量が高い区域ほど、高い発症率を示した。従って、がん発症の原因は事故放出の放射線と推定される。そもそも、正確な被ばく量の測定は、今となっては、もはや不可能である。「被ばくによる影響は見られない」とする根拠となった被ばく量の推定値は過小評価と推定される（以上は、上記「第1の見方」への反論）。
- 今回の検査結果から、原発事故とは無関係の「通常発症」率を求め、全体の発症率との差から「被ばく発症」率を算出してみると、「原発事故とは関係のない 18 歳の甲状腺がん」は「100 万人に 36 人」と計算された。そもそも、「通常は 100 万人に 2 人」と報告されてきた「がん統計」の数値は、国立がんセンターが集計した自発検診の結果である。今回の検査は集団検診であって、両者は全く性格を異にしている（以上は、上記「第2の見方」への反論）。
- 更に、上記の計算を進めると、「被ばく発症」に、事故から約 6 年までの「第一波」と、それに続く「第二波」の 2 つの波が確認された。「第一波」は被ばくによる免疫機構の破壊の結果生じたがんであり、「第二波」は幼児期の被ばくによる遺伝子変異が原因となったがんである、と推論される（以上は、新たな見方 = 「第三の立場」の提示）。



- e. 上記「第三の立場=宗川の主張」の意義は、「311 子ども甲状腺がん裁判」の原告を支援する議論として確認される。その概要は以下の通り。
- **原告（小児甲状腺がんを患った方々）の、現在の主張：**がん統計では 18 歳の甲状腺がんは「100 万人に 2 人」である。今回の検査で発見された患者のほとんど全では、被ばくによる遺伝子変異で発症したと言わざるを得ない（第 2 の見方）。
 - **被告（東京電力株式会社）の、現在の原告の主張に対する反論：**原告に対する原発事故に由来する放射線被ばく量は少ない。小児甲状腺がんの発症は遺伝子変異が原因であるが、その変異は原発事故とは無関係である。今回の検査は「集団検診」であり、そこにはスクリーニング効果が生じた。その結果、多数の患者が発見された。また、チェルノブイリで見られた小児甲状腺がんにおいては、特殊な遺伝子変異が見られたのに対し、今回発見された小児甲状腺がんには、成人の甲状腺がんに見られる遺伝子変異が多く検出されている。即ち、チェルノブイリで見られた遺伝子変異は観察されていない（第 1 の見方）。
 - **宗川論文から指摘できること：**宗川論文は、小児甲状腺がんの発症率には二つのピーク（第一波と第二波）があることを示している。チェルノブイリでは「第二波」だけが観察されていて「第一波」は見逃された可能性がある。現在発表されている福島県立医大の報告には、「第一波」の遺伝子変異の情報だけが確認できる。しかし、それ以降（第二波）の報告がまだなされていない。そして、「第一波」の検査の結果についていえば、確かに、成人に見られる遺伝子変異が多く検出されている。即ち、チェルノブイリで見られた特殊な遺伝子変異は、観察されていない。しかし、「第二波」以降の検査結果から、チェルノブイリ型の遺伝子変異が見つかる可能性が強く懸念される。その遺伝子検査の報告は、まだなされていない。宗川は、福島医大に対して遺伝子検査の早急な実施を求める要望書を送付したが、未だ回答がない。
- 以上は、上記「被告（東京電力株式会社）の反論」への明確な反論となる。

(2) 後半：野家啓一の提唱する「科学の解釈学」と、その福島原発事故における意義

- a. 野家啓一（東北大学名誉教授）は、
科学には「科学の論理学」と「科学の解釈学」がある、と述べている。
- **科学の論理学：**科学理論は観察事実によつて検証ないし反証され、そのよう試行錯誤を重ねながら理論はより良く自然現象を説明し得るようになり、漸近的に「科学的真理」に向かって前進していく、という考え方。
 - **科学の解釈学：**観察とは「事実はあるがままに受動的に写し取ること」ではなく、「理論的枠組に則って事実を解釈的に構成する能動的行為」であり、また、理論はそれを否定するような観察事実によって反証されるのではなく、それと対置される別の理論によって取って代わられる、という考え方。



- b. 原発事故を経て、「同じデータを見ても、違う解釈があり得る」ということが明確になった。「科学の論理学」を無限に重ねても、現状に対応できない。従って、
- 「科学の価値中立性」を自明視せず、むしろ「科学の解釈学」を採用し、
 - それぞれの解釈の背後にある「主観的願望」を自覚・認識し、
 - 各自が自らの「主観的願望」をできる限り抑え込むように努力する、
- という責務が、科学者に求められている。
- c. 今回の宗川論文は、その努力の成果の一端である。その結論が持つ意味は、「放射能公害」を指摘し公的な対応を求める根拠を提供するところにある。

——ありがとうございました。とても刺激的な内容であったと思います。

木田さんから、感想やコメントなど、頂けますでしょうか。

木田：

では、その前に、まず、加藤さんたちから批判された先生の本（『福島小児甲状腺がんの「通常発生」と「被ばく発症」』）を読みました感想から、お話をさせてください。

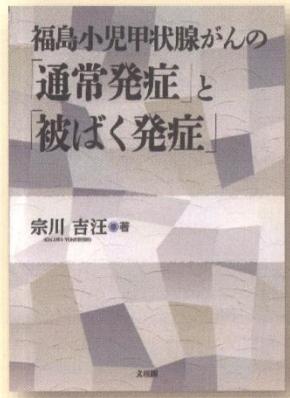
3 具体例1 「甲状腺がん」をめぐる学習

——それでは、具体的に、学習会の様子をご紹介いただきましょう。11月も学習会がありましたね。

木田さん
はい、私が一冊の本の紹介をし、井上さんが「日独の比較」を主題とした研究報告をしてくださいました。

——木田先生の紹介くださった本は、どんな本ですか？

木田さん
『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』というブックレットでした。宗川吉汪(そうかわ よしひろ)



32

木田さんの「感想」は、東北ヘルプ ニュースレター「2023年クリスマス号」27頁以下に掲載されています。東北ヘルプのホームページから、ご高覧いただけます。

原発事故の影響で、小児甲状腺がんがたくさん発生しているということについて、私自身は、「たぶん原発の事故の影響なんだろう」とは、思っていたのです。しかし、いろいろな方たちのお話を聞く中で、考えさせられました。特に、甲状腺検査・エコー検査をしておられるお医者さんたちのお話を聞きますと「甲状腺がんの患者さんというのはね、実は、

けっこう、見つかるんだよ」と言うのです。「大人の検査の事例を考えると、今回の大規模調査の結果、たぶん、かなりたくさんの数が見つかるだろう」ということを、聞いていたのです。

そしてやはり、甲状腺がんを発見した数が、非常に多かった。その結果を受けて、今回の調査を受けた子どもさんたちの中に「がんの症状はないけれども、甲状腺がんの細胞を持っていた人」が、原発事故の影響とは無関係に、結構いらっしゃるのだろう、と、私は予想したのです。

ただ問題は、そうした人がどれくらいの割合なのか、ということです。原発事故が原因で甲状腺がんの細胞を持つに至った子どもも、もちろん、いると考えられる。でも、そうした研究がないので、よく分からぬ。

そしてほどなく、今回の検査の結果は「すべて、原発事故の被ばくによるものだ」という意見と、「いや、被ばくによる発症はなかったのだ」という両極端の意見ばかりが聞こえてきました。私は、その両方の意見に触れるたびに「そんなはずはないだろう」と思ってきました。

それで、宗川先生の論文を読んだ時、その両極端の「中間」と言っては失礼と思うのですが、そうしたもののが示された！・・・と、喜んだのです。そもそも現実は「そういうものの」だと、私は思うのです。

つまり、もともと「がんの素質をもった人」が一定数いる、ということが前提で、それが大規模調査の結果、はじめて発見された。そして、そうではない・原発事故の被ばくによって「がん細胞」を持ってしまった人がいる。その両方の人数が、まとめられて数字になっている。だから、それらを切り分けて見積りをしなければ、原発事故の子どもたちへの影響は、はっきりとしない。そして、その見積もりは、可能だ——それが宗川先生の本の示しているところであり、私にはとても、納得の行くものでした。そこには、類書にない価値があった、と思います。

その中で、ただ、一つ疑問に思ったのは、先生の「見積もり」の仕方が、先行検査と本格検査の一回目とをつなぐ、という方法を取られたことでした。それでは、二回目、三回目と続ければ、グラフはぐちゃぐちゃになるだろうと思ったのです。「そんなに簡単に行くか」と思いました。それは決して、単純なものではないと思われたのです。

でも、今日の話を伺って、納得できました。甲状腺がんの発生増加には「第一波」と「第二波」があるというお話です。とても、感心しました。実際にそういうことが実証されるということがあれば、それは「見えなかつた深刻な現実をハッキリと提示してください」という意味で、素晴らしい成果だと負いました。

福島県に住む私の周りの牧師たちの間でのことを思い出します。若い牧師たちには「福島県は危険だから」と、転任・転出が勧められました。そして、その代わりに「60歳を過ぎた年配の牧師たち」が次々と赴任してきました。その牧師たちが、着任後にすぐ、何人も、亡くなっているのです。

宗川：

だいたい、おいくつくらいで、亡くなっているのですか。

木田：

だいたい70才くらいの方々です。年齢から言えば、あるいは「亡くなても不思議ではない年齢」かもしれませんが・・・。

宗川：

でも「70才くらい」という事では、やはり、お若いですね。

木田：

とにかく、元気いっぱいの先生たちだったのです。そんなに急に具合が悪くなるということは、納得がいかないと思いました。その時私が考えたのは、もともと、その人たちのお身体には、がんを発症する等の素質があって、福島へ転任するに当たっての負荷がある。被ばくもありますが、ストレスもある。そして免疫の機構が障害を受けた——ということです。そういうことで、がんを発症したのかな、と、その時は考えたのです。

でも、今日のお話を聞いていたら、被ばくの影響で免疫機構が破壊されるということと、被ばくしたことと、遺伝子が特別な形で変異していくということ。その二つの出来事がある、それは、いきなりいっぺんに現れるのではなくて、最初は免疫がやられて、その後、遺伝子の変異が問題を引き起こす、という順序が考えられる。もしそうだとすれば、私が自分の周りで経験してきたことと整合すると感じて「なるほど」と思いながら、お話を聞きました。

私たち「福島県キリスト教連絡会 放射能問題対策室」の仲間が、ずいぶん徹底的に研究をして、それを共有してくれているのですが、その成果を、お話を伺って思い出していました。その研究成果は、以下のよう�습니다。

- (1) 確かに、原発事故の影響を受けた人には、被ばくして、遺伝子が変異し、がんになる、という可能性が生じている。しかし、そうだとしても、それだけで、必ずしも「発がん」に至るものではない。人間の免疫機構は、けつして侮れないものだ。
- (2) しかし、低線量被ばくを日常的に引き受けなければならない場所、たとえば福島県の特定の地域にいるということは、常時、免疫機構に負荷

がかかっている、ということである。従って、その人の通常の発がん要因となる生活習慣（たとえば「ヘビースモーカーである」とか、「飲酒量が非常に多い」等）を持っていた場合は、大変危険である。つまり、そうした免疫機構への負荷が、恒常的に続く放射線被ばくと重なってしまうと、ひとたまりもなく「がんになる」ということが、あり得る。

- (3) 従って、我々は、被ばくした方がたに向けて、警鐘を鳴らさないといけない。震災当時、避難することもできず、ずっと被ばく地に居続けた子どもたち・大人たち・たくさんの人たちにとって、それはとても重要なことである。つまり「生活習慣を整えることで、がんを予防することも、できる」と考えられるのだ。

・・・そんなことを話し合っていたのです。今日のお話は、私たちの話し合いを補強してくださる内容だったと思います。「本当に、そういうことが起き得るのだ」と、実感したことでした。全体として、私の中で整理がついた時間でした。ありがとうございました。

——加藤さんたちの批判について、ここで改めて、整理をしてみたいと思います。

木田：

加藤さんたちのご批判は、宗川先生の本についての私の「まとめ」を踏まえてのものでもありました。私の「まとめ」について、加藤さんたちからの指摘は、「小児甲状腺がんの発症率は、100万人に2人程度、という事ではないのか」ということでした。私が直接、その様に指摘されたのではないのですが、私の「まとめ」を記した文書を、川上さんから加藤さんにお送りいただきまして、その資料に、加藤さんが、赤い字で、こうしたことを見書き込んだ、そのコピーを、また川上さん経由で、私も見せてもらったのです。

でも、私は、それには、どうしても納得がいきませんでした。どうしてかと言うと「検査をすれば、たくさん見つかる」ということ（いわゆる「スクリーニング効果」ですね）を、福島県側もよく理解していて、それなりの準備をしていた。韓国の事例で、乳がん検診と一緒に甲状腺がんを検査したら「韓国の女性が世界で一番甲状腺がんの発症率が高い」ということになってしまった。そういう実例に即して、今回、検査方法に工夫を加えていた。それがこの検査だったのです。しかし、その予想をはるかに超える数で、小児甲状腺がんが見つかってしまった。それで、大騒ぎになっている。それが、福島の現地で私たちが見て來たことです。

その実感から、私はやはり、原発事故による発症数がかなりあった、ということを推察せざるを得ないです。ただし、それは、「スクリーニング効果」があって、なお、それをはるかに凌駕して、原発由来の小児甲状腺がんの発症があった、ということを意味しています。さらに恐ろしいことに、それは、震災直後から始まっていたのだろうと、私は直感

しました。専門家と呼ばれる方々からは、「そんなことは、起こり得ない」という議論ばかり聞かされ、「どうしてそう決めつけられるのか」と、私は疑問を強めていました。宗川先生の本は、私と同じ結論をハッキリと示してくださいって、「読んでよかった」と思ったことだったのです。ですから、加藤さんたちのご批判には、納得が出来なかったのです。

宗川：

加藤さんとは、ずっと、議論を続けています。ですから、加藤さんは、私の議論も、よくご存じだと思います。一つお伺いしたいのです。今回は、どんな風に、加藤さんは私の議論を批判したのでしょうか。

——「通常、日本では、100万人に2名程度しか、小児甲状腺がんは見つからない。しかし、福島県だけは、原発事故に関係なく、たくさん見つかる。と、そのように、宗川氏の議論は示唆している。それは、結果的に、福島県が特殊だ、ということを示唆してしまうのではないか」というのが、加藤さんのご批判で印象に残っています。それは、それで、なるほど、と、私は得心が行きました。

なるほど、国立がんセンターの統計によると、「小児甲状腺がんは、100万人に2人程度」と、データが出ています。それが日本全国の状況なのに、福島県だけは「100万人に36人」であるということを認める、ということは、どうしてもできない。そういう加藤さんのご議論に、私は納得したのでした。

でも、今日、また違うご議論を宗川さんから伺い、また「なるほど」と思いました。「100万人に2人程度」という小児甲状腺がんの発生率は、「自発的な検診」の結果として、得られた数値である。他方で、今回の福島県のデータは「子どもたち全員ができるだけ検査した」結果である。その二つは、条件が違う。条件が違う検査の結果を、そのまま自動的に引き比べることは、少なくとも「科学的（ヴィッセンシャフトリッヒニ見たままを、そのままに検討するという）態度ではない」ということ。そのことを、今日、私はお話を伺っていて、感じました。

宗川：

はい。私は、国立がんセンターが提示する「自発的な検診」の結果と、今回の福島県の「県民健康調査」の結果とは、そのまま比較することが出来ないと考えているのです。

——その上で、私が今日、宗川先生のお話を聞いて思い出していたことがあります。最近「ターボがん」という名前がネット上のスラングとして流通している事、なのです。進行が異常に速いがん、という意味です。私が思い出したのは、福島第一原発から30キロ圏内にある川内村の方から、お伺いしたことです。

「原発で働いていた人たちも、もちろん、がんになる。震災前も、そうだ。ただ、その人たちのがんは、速いんだ。押しなべて、速い。がんが見つかってから、あっという間に亡くなる。川上さん、みんな、そうなんだよ。これは、俺たちの実感なんだよ。」

・・・と、そう、現地の方々が断言していたのです。それは、いったい、何なのか。ずっと、気になっていました。それは、もしかすると、原発に由来するがんの遺伝子は、特殊な形に変異している、という事の結果ではないか。というのも、「原発による被ばくは、遺伝子が特殊な形で変異する」ということが、チェルノブイリ事故の小児甲状腺がんの調査から、分かっていた、というのですね。なんと、そうか、そうかもしれない・・・と、ドキッとしたのです。

今回、勉強させていただいて、私たちは本当に、チェルノブイリ原発事故から、学んでいないと知りました。チェルノブイリの事故の時、学者たちは、たいへんな圧力の中で、「言いたいことも言えなかった」ということも、今回、学びました。



さて、ここで、一点、加藤さんから提示されている疑問点を、私から申しあげても、よろしいでしょうか。

宗川:

どうぞ。

——加藤さんは批判のコメントを論文としてまとめて下さいました。その中の「一文」に、加藤さんの批判の全てが、尽きてているようです。それは

しかし、宗川氏は A 地区の BS(先行調査)と FSS1(第一回調査)について誤った時系列を採用した。

・・・という「一文」です —— いかがでしょうか。

宗川:

そうです。

——この「一文」について、宗川先生は、査読者（中立な立場から論文を審査するレフリー役を担う学者）のコメントを引用する形で、「加藤らは…A地区のみを議論した。しかしながら、当然、他の B から D についても同様のはずである。さらに、A 地区の人たちがずっと A 地区に留まっていたという保証はない。」と、疑問を提示されていました。そして「データは、福島県民健康調査検討委員会の発表した報告に基づいています」と応答されました。しかし、それ以上の積極的な応答がなかったように、拝見したのですが。

宗川:

いいえ。私ははっきり、応答しています。明確に、反論したつもりです。査読者も、加藤さんも、私の反論が分かったはずです。査読者のコメントには、こうもありましたね。

「査読者の一人として、福島県県民健康調査検討委員会が発表した文献を調査し、宗川の示した期間が誤りでないことを確認した。むしろ加藤らは彼らの主張の根拠を示すべきである。(加藤らは宗川の採用したA地区の検査期間が誤っていると主張した)」

私は、明確に、「宗川は、福島県の検討委員会の出したデータに、忠実に従った、までだ」ということを述べています。これを、私の反論として申し上げたのです。それが、最大の反論です。と言いますのも、「それ以上のこと」は、私には「分からない」とすべきだからです。むしろ、加藤さんが「検査期間が誤っている」と言うのであれば、その根拠を示すべきです。私は、提出されているデータをそのまま用いました。あるいは、そのデータが間違っているかもしれない。それは、議論すべきです。でも、議論の為には、根拠がなければいけません。でも、私が用いたデータを「誤りだ」とする根拠は、加藤さんたちの論文の中に、まったく見いだせないです。通常であれば、それは註などを用いて、明示するべきものと、私は思うのですが。

——ありがとうございます。これで、加藤さんのご批判と、
そのご批判への宗川さんの反論が、はっきり語られた、と思います。

では、議論を前に進めさせてください。

「主観的願望ができるだけ抑える」ということが、宗川さんのご研究の重要な特色であると思います。それは、「正しい答へと、ひたすら討議し、議論を積み上げる」という「科学の論理学」から離れて、「いろいろな立場から、いろいろな正しさが出てくる」という「科学の解釈学」に立場を移した結果だと、先ほどのご講義を伺ったことです。

そして、先ほどのように、「スクリーニング効果はないはずだ」という立場からの批判を、宗川さんは、受けておられる。議論が続いているわけですね。

「スクリーニング効果しかない」という「第1の見方（政府・東京電力株式会社・原子力産業関係者、等）」と、その反対にある「ないはずだ」という「第2の見方（「311 子ども甲状腺がん裁判」の原告と支援者、等）」が、真正面から論争し、それぞれが正しさを獲得しようと議論を積み上げ続ける。これが、「科学の論理学」の立場ですね。他方で、ふたつの相反する立場の両方を飲み込んで、「それぞれの正しさ」も無前提に否定することなく、しかし「自分はどう考えるか」を考え続ける。それが「科学の解釈学」だと、私は理解しました。

「科学の論理学」の場合、「先入観は、あってはならない」と決めてかかります。「先入観」があったら負け、という感じですね。他方で、「科学の解釈学」の場合、自分自身がどこまでも先入観や立場に捕らわれていることを自覚して、それをできるだけ抑制すること

に注力する。なるほど、そういうご研究は、新しい次元を開くと、希望を覚えます。

ただ、私は一つ、その上で、戸惑っていることがあります。

「ハンフォード」と「福島イノベーションコースト」のことです。

「いろいろな立場があり、いろいろな正しさがある」とした場合（つまり、「科学の解釈学」の立場を取った場合）、私たちは、それぞれ、「どの立場・どの正しさを取るのか」を迫られます。一人ひとりの責任が問われることになるわけです。

例えばキリスト教神学でも、同じ議論がありまして、その中で私たちは「小さくされた立場からの・弱くされた人々にとっての“正しさ”」を考えるように、と、努力してきました。ほとんどの場合、それで、責任ある進路を見出すことが出来るように思うのです。

でも、今、私たちは、頭を抱えています。福島県浜通りの「故郷を奪われた方々」の多くが、「福島イノベーションコースト構想」に賛成しているのです——もちろん、それもプロパガンダなのかもしれません——。でも、その「構想」は、米国に実際にある「プルトニウムを抽出した結果としての巨大な汚染とその保障・回復の現場」を、福島に持ち込もうとするものです。その結果として、経済的な繁栄が起こり、若者が福島にたくさん移住し、そして「復興」するなら、「それでいい」——そのようには、なかなか、言いきれない私がいます。でも、「小さくされた人の立場」に立つなら、「それでいい」と言わなければならない、のではないか。たしかに、福島の・現地の人々が「それでいい」というのだから・・・でも・・・と、私は、頭を抱えています。

「福島イノベーションコースト構想」
については、とても洗練された
ビデオが配信されています。

<https://x.gd/JARZW>

あるいは右の
QRコードから
ご覧ください。



宗川：

そうですね。たとえば、「核兵器は、絶対悪だ」という言葉があります。湯川秀樹の言葉です。私は、それは「そうだ」と思っています。でも「原子力技術は、絶対悪だ」と、言えるか。私は「そうだ」と言いたいとも思うのです。しかし、そうは言えない。

色々考えまして、私は「原子力技術は、絶対危険だ」と言うようにしています。たとえば、核融合のような新しい技術があります。それは「絶対危険」とは言えない。でも、私

たちは、その技術の実用化されるまで待っているわけにはいかない。私たちは今、決めるべきことを決め、すべきことをしなければならない。「絶対危険」な原子力技術への態度は、その様にして決まると思います。まず、そのことを思いました。

甲状腺がんについても、お役に立つかもしれないことを、一つ、思い出しました。原発事故と甲状腺がんについての福島での私の講演を、ある政治団体から断られたことがありました。「どうしてですか」と訊ねると、その答えは、とても驚くべきものでした——「甲状腺がんは、高度に政治的な問題なのです」と。そう、おっしゃるのです。

その時、私は「いや、なるほど・・・」と、思いました。

今、ご質問を受けて、私の経験から、そんなことを思い出したのでした。

——なるほど。そうですね。科学者は、誠実に「科学」と向き合う。そして、「今」決めなければならないことを、果敢に決めて行かねばならない。「絶対危険」なものと、どう向き合えばよいのか、科学者は「科学者の立場」で、責任を果たして、考え、決めて、行動するのだ、ということですね。

私は神学者で、宗教者で、支援者です。その立場に立つ私は、その立場での言動に集中する。なるほど。私には、私の責任がある。

そうすると、大事なことは、それぞれが互いを認め合い、支え合う、あるいは、少なくともつながり合い、邪魔しないようにする、という事にありそうです。それそれが、主観的願望にまとわりつかれながら、とにかくそれでも、それを抑制しようと努力しつつ、自分の責任と向き合う。当然、そこには間違いも含まれるし、失敗も招致してしまう。そうだとしても、それをお互いにゆるしあい・励まし合いながら、つながる。そして、それぞれの一つひとつの努力が、結び合う。こうした総体で、事柄に向き合えばよい。そういう事かな、と思いました。

宗川：

私に、ひとつ、持論があります。

「食料とエネルギーは、地産地消すべきだ」というものです。

今、日本の豊かさを支えているのは、自動車産業でしょう。でも、これからは、自動車産業のようなイメージでは、いけないと思うのです。大きな柱があって、そこに全体が統合されて、一つになって行く、というイメージは、無理だと思うのです。たとえば「再生可能エネルギーがいい」と言っても、メガソーラーや巨大風力発電機では、結局、環境を損ないますね。そういうイメージではなくて、適正な規模でまとまり、一つひとつの「まとまり」がつながり合って、緩やかに全体を構成する、という姿が大事だと思うのです。そのイメージが「食料とエネルギーを地産地消でまかなう」というものです。

——なるほど。「自動車産業」のような道を進むのが、先生のおっしゃる「科学の論理学」の立場ですね。他方で、「地産地消」のような道を進むのが「科学の解釈学」。科学においても、「ランセット」や「ネイチャー」あるいは「国連の委員会」や「文部科学省の審議会」そして「東京大学」等が、「大きな柱」となって、そこに全体が統合されるように議論・論争が展開し、収斂する・・・というあり方は、もう、無理なのだろうと、原子力災害の現場で、実感させられています。

そうすると、もうひとつ、今日的な課題が気になります。つまり、先ごろ米国のトランプ大統領が発布した「ゴールド・スタンダード・サイエンス」という考え方です。



<https://www.whitehouse.gov/presidential-actions/2025/05/restoring-gold-standard-science/>

「ゴールド・スタンダード・サイエンス」というのは、つまり、「透明性・再現性・反証可能性」が確保されるなら、「ネイチャー」や「ランセット」等の権威に認められない学説でも、まったく平等に取り扱われ、米国の国家予算を獲得できる、という考え方であるようです。福島の現場はずっと、「国連」や「東京大学」といった学問の権威に抑圧され窒息させて来たように、私は感じています。ですから、この「ゴールド・スタンダード・サイエンス」という考え方には、少しの希望を感じるので。でも、やっぱり、何か、引っかかる・・・

宗川：

それは「米国大統領」が言っていることだから、だと思います。別に、ドナルド・トランプさん個人の問題ではないのです。そうではなくて、「権力者」が「科学の解釈学」のようなことを語る時は、危険だということです。結局、権力によって持論を展開し、権力によって議論を押し切る、というようなことになるでしょう。

——なるほど。「科学の解釈学」を採用するときは、「権力」との関係が、
倫理的に、とても重要な課題になるんですね。

宗川：

ですから、私は、「311子ども甲状腺がん裁判」の原告を支援する議論として、
「科学の解釈学」の立場をとることが重要だと思っているのです。

残念ながら、現在の科学の「権威」や「権力」は、「福島原発事故の影響は無かった」という議論で固まってしまっています。そこに「科学の論理学」で挑むことは、どうなのか。原告となられた甲状腺がんの患者さんたちを考えると、「敗北してもよい」ということには、決して、ならないと思うのです。

私は、「科学の解釈学」に立って議論を開いて、「小児甲状腺がんの通常発症の数」をきちんと見極め、そして「公害」の一般的な法理を用いて原告の方々・被ばくされた方々の権利を守る、という方途を取るべきだと思っています。この道筋にだけ、巨大な権力に勝利する可能性があると思っているのです。なんとなれば、それこそが「真理」に到達する道だからです。真理は、勝利するはずです。私はそう考えているのです。

木田

宗川先生に、一つ、質問があります。もし、福島の現地から、お考えを発信する機会を提供申しあげましたら、私たちの所へも、来てくださることは、可能でしょうか。

宗川

はい。もちろんです。よろこんで。

——それは、素晴らしいことですね。きっと、その機会を！と願います。

今日は、本当にたくさんのこと教えていただきました。そして、新しい希望を得た気がします。これからもどうぞ、よろしくお願いいいたします。



会計報告

2025年6月30日(月)午後7時半から、オンラインで、NPO法人東北ヘルプの年次総会を開催します。以下はそこに提出する貸借対照表です。監事二名の監査を頂き、無事に総会に提出できます。

2024年度会計を締めました。2024年4月～2025年3月について、
収入は、献金件数437件・献金・会費等総額5,534,803円、
支出は、総額5,525,864円、収支差額は8,939円でした。

皆様のご支援の賜物として、2024年度の財務も
(見事なまでにぎりぎりピッタリ)守られました。感謝して、報告いたします。

2025年6月26日

東北ヘルプ代表 川上直哉

貸借対照表

2025年3月31日現在

特定非営利活動法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ		(単位:円)	
科 目・摘 要		金 領	
I 資 産 の 部			
流 動 資 産			
現金預金	1,056,977		
仮払金			
流 動 資 産 合 計		1,056,977	
資 産 合 計			1,056,977
II 負 債 の 部			
流 動 負 債			
預り金	0		
流 動 負 債 合 計		0	
負 債 合 計			0
III 正味財産の部			
正味財産			
前期繰越正味財産額	1,048,038		
当期正味財産増加額	8,939		
正 味 財 産 合 計		1,056,977	1,056,977
負債及び正味財産合計			1,056,977

卷末言

「被災後の日常」という言葉があります。瓦礫の山が広がり、放射能の高さに怯え、あるいは無人となった町が広がる・・・そうした「被災地」にも、あちこちで、日常が帰ってきます。異常な状況に、被災者が生活を馴染ませる。そしてあるいは、多くの支援の中で、町が復旧して行く。「日常」が始まり、続く。買い物があり、通勤・通学があり、洗濯・炊事があり、余暇がある。しかし、その「日常」には「被災地」の影が差している——「被災後の日常」は、そういう現実を指して使う言葉です。

「被災後の日常」には、支援が必要です。そして実際、多くの支援が続きました。次々と変わる「被災後の日常」に翻弄される被災者を、全国・全世界のみなさんが覚え、支えて下さいました。

「被災後の日常」は、現在の日本社会の課題を極端に色濃く浮き彫りにします。「ゆでガエル」という表現（悪口？）で語られる、ゆっくりとしたスピードで進む深刻な課題、たとえば「少子高齢過疎」などが、急激に・極端な形で、被災地に現れます。復旧したはずの津波被災地には急激な人口流出があり、「外国人」の存在なしには、再建された工場を稼働させることもままならない。それが、たとえば最大の津波被災地・石巻の「日常」になっています。

今回のニュースレターの最初の記事は、そうした中で私たちと共に生きて下さっている方々、とりわけ「被災後の日常」を共に生きるべく移住してくださったお二人に御登場いただきました。「排外主義」が、選挙日程と政治状況に煽られて、猛威を振るい始めています。その多くは、まだ「外国人」や「ムスリム（イスラム教徒）」と共に生きる体験の、極端に乏しい中から、発生しているように思われます。今、「被災後の日常」の中から、私たちは「すこし先の未来」を提示できないか。私たちは、そんなことを思っています。

* * *

そうした中の出来事です。2025年2月の宮城県議会で、「ムスリム土葬について」と題して、「一方的な多

文化共生というものについての、ある種の反発、違和感というもの」について、ある議員が、本会議場での「一般質問」として、公式に語っていました。「何といいますか、無条件に日本人が讓歩させられるというような受け止め方をしている向きもあると思う」と述べるその「一般質問」は、以下のように語るのでした。

…やはりこれは一神教相手の話ですから、後々全国的にも「くれくれ」「やれやれ」のあしき先例になってはいけないと思うのですよね。しっかり筋を通して議論が必要だと思うのです。ムスリムは、日本人のような墓参の習慣がありません。基本的には埋葬すれば事足りるということもありますので、年々再々利用料を徴収しなくてはいけないと、これ課題ですよね。また先行例を見ますと、無許可で勝手に埋葬する事例などが相次ぐという面もあると。ですので経営面の課題が明らかだと思います…

こうした発言に違和感を抱き、「それは違う」という発言してくださった県議会議員も、おられました。平岡しづか議員でした。平岡議員の発言の間、本会議場にはいくつもの野次が飛んだそうです。その出来事自体を大切に受け止め、平岡議員は、東北ヘルプ宛に連絡をくださいました。「ムスリム（イスラム教徒）の方々の本当の様子を知りたい」ということでした。ちょうど、今回のニュースレターの記事を書き上げたばかりのタイミングでした。川上から話を聞いて下さり、私たちの記事もお読みになりつつ、平岡議員は、同じく心痛めていた議員に、会派を超えて、粘り強く声掛けをしてくださいました。

そして6月25日のことです。午後2時から、議会最長老である自民党の藤倉知格議員が、県議会本会議場に質問者として立たされました。藤倉議員は、この150年間を振り返って、キリスト教の日本へのかかわりの深さに言及しつつ「同じように、今、イスラム教徒のみなさんが、私たちと共に暮らし始めています。人間として、その方々のいのちに丁寧に向き合わなければなりません」と、本会議場で、実に格調高く、語ってくださいました。その時、本会議場は、水を打ったように静まり返っていました。

東北ヘルプニュースレター「2025年夏号」

* * *

また、今回の宗川先生の記事を作成している時に、ニュースレター「2024年クリスマス号」に御登場いただいた加藤聰子さんからメールが入りました。

「福島原発事故による甲状腺被ばくの真相を明らかにする会」の署名運動に協力してほしい、ということでした。そのホームページには、以下のように記されています。

「被ばく線量の増加に応じて甲状腺がん発見率が上昇するといった一貫した関係(線量効果関係)は認められなかった。甲状腺がんと放射線被ばくとの間の関連は認められない」という内容です。

これは本当でしょうか？

実は、根拠となる症例対照研究や最近報告のカプランマイヤー一方の研究の元になる被ばく線量にどのような甲状腺等価線量が使われたかは全く報告されていないのです。線量が明らかでないのに、甲状腺がんと被ばく線量の関係が分かるはずがありません。

原発事故時 0-18 歳の方たちのなかから、既に 400 人に達する甲状腺がんが発見されているのに「甲状腺がんと放射線被ばくとの間の関連は認められない」と根拠なく発表しておられる評価部会長、評価部会で研究報告されている県立医科大学教授方、線量評価をされた研究者、市町村別の甲状腺等価線量の平均値を公表してくださいという要請に対して、全員が黙して語らず。

このコーナーではこの状況を打ち破り、幅広く協力して、福島で、東日本で起きている健康影響の真実を追及していきます。皆さんのご关心、ご協力を待ちています。

署名は、<https://x.gd/J1MYR> か、下の QR コードから、ご参加いただけます。ぜひ、ご協力いただければ幸いです。



* * *

最後に、同封した「チラシ」についても、記させてください。

「東北ヘルプ」は「仙台キリスト教連合」の「3.11」支援対策部門です。「仙台キリスト教連合」は、毎年 8 月の「平和祈祷集会」を続けています。今年は「戦後 80 年」を覚えて祈る時間を持ってから、「ムスリムとクリスチヤンのトークセッション」を予定しています。「いのちと平和」について、今回のニュースレターを踏まえて、日本人ムスリムの西川慧先生と川上が短い対談をします。8 月 10 日（日）の午後です。オンラインでも、参加いただけます（Zoom を用います）。その概要を記したチラシを同封いたしました。こちらもどうぞ、ご参加を予定いただければ幸いです。

* * *

「東北ヘルプ」は「被災支援ネットワーク」という名前で始まりました。私たちは「ネットワーク」です。それは「被災後の日常」をネットワークし、現場に立ち続ける支援者をネットワークし、そして、全国の支援者をネットワークする。その様にして、14 年余の月日を過ごしてきました。つながってくださるお一人おひとりに感謝を深めています。実に多様な方々が、つながってくださっています。そしてその「つながり方」も、このように多様になりました。

一つひとつ、神様の賜物と、
ただただ、感謝しています。

2025年6月26日

東北ヘルプ代表

川上直哉



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師）

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッショント東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞姪（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書き等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP 

Per crucem ad lucem (十字架を通って光へ)

〒 980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@touhokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652